ISSN 1344-5642

図書館報

SEINAN GAKUIN UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

2012.April No.172

ブックレビュー 新入生にイチ押しの1冊

1 「危機と経済学」
図書館長　尾上 修悟

2 ブックレビュー
「全国アホ・バカ分布考：はるかなる言葉の旅路」
大学博物館長 国際文化学部 国際文化学科 教授　高倉 洋彰
「自分の感受性くらい」
社会福祉学科実習指導室 実習助手　穴井 あけみ
「池上彰の新聞勉強術」 図書情報課 主幹　坂口 久人
「The Elements of Style」
国際センター所長 商学部 経営学科 教授　小島 平夫
「下町ロケット」図書情報課 課長　古庄 敬文
「タイムスクープハンター」図書情報課　小副川 明子

3-4 世界の図書館 チェコ・ロシア編
バプテスト神学院図書館　神学部 神学科 教授　松見 俊
ロシア国立図書館（旧レーニン名称ソ連国立図書館）　経済学部 国際経済学科 教授　上垣 彰

5-6 システムリプレイス
図書情報課　坂本 里栄

7 蔵書ギャラリー no.13
『ハーグ国際法アカデミー「ハーグ国際法講義録」（1923年～）』
法学部 国際関係法学科 准教授　小寺 智史

SEINAN GAKUIN UNIVERSITY

「危機と経済学」

図書館長　尾上 修悟

世界金融史研究で著名なC.P.キンドルバーガーは、歴史的に論じられてきた経済問題の中で、金融危機ほどありきたりのものはない、と述べている。([6])確かに、資本主義が登場して以来、金融危機は、あたかも必然の如くに繰り返されてきた。しかも、17世紀のオランダで勃発した、いわゆるチューリップ恐慌から今日のサブプライム危機に始まる一連の危機に至るまで、それらの引き起こされる本質的要因はそれほど変わらない。さらに特筆すべき点は、そうした危機に見られる周期性である。そして、その周期は、1987年のバブル崩壊以降、次第に短縮される傾向を表している。事実、1997年のアジア危機から2007年のサブプライム危機に至るまでの10年周期で生じた危機は、その後、毎年の如くに新たなショックを与えてきた。まさしく今日は、資本主義史上、稀に見る大危機に襲われている、と言っても過言ではない。

こうした深刻な状況に際し、経済学者は一体、いかなる役割を果しているのか。このことが真先に問われるに違いない。それはまた、経済学そのものの意義をも問う。実は、この場に及んで経済学者、そして経済学までもが、その無能さをさらけ出している。フランスの新聞ル・モンド紙は、この大危機に直面してエコノミストは何も助けにならない、とかれらを指弾した。(*Le Monde*,editorial,14,septembre,2011)かつて、19世紀後半のイギリスの経済危機に対し、当時の経済学者と経済学を根本から批判しながら、新たなパラダイムを打ち出したJ.ラスキンも、経済学者は危機に対して何も言えない、とかれらを非難した。([4])今日、経済学者は、こうした厳しい批判の声に真摯に耳を傾ける必要があるのではないか。ここで私が特に注目したいのは、ラスキンの主張した、経済学におけるパラダイムの転換である。ラスキンは、19世紀のイギリス産業資本主義の絶頂期において、隆盛を極めた古典派経済学を根底から批判し、人間中心の人道主義的経済学を構築しようと試みた。ところが、ラスキン経済学は当時、完全に抹殺され、その後忘れ去られてしまった。しかし今日、その意義を再確認する必要があるように思われる。現代ほど人間を置き去りにした経済システムが遂行されているときはなく、また、人間を復権させる経済学が強く求められているときはないからである。

ラスキンの問題意識には、人間の喜びを実現させるための労働、そして、その果実としての経済システムという考えがつねに潜む。古典派経済学はまさに、その対極として、人間疎外を促進させる装置と化した。ラスキンはこの観点から、彼らの唱える自利心に基づく経済人、という考えを糾弾する。この点は、富に対する規定の仕方に反映された。古典派が、富を個人の報酬から捉えるのに対し、ラスキンは、人間こそが富であり、それゆえに立派な人間を作り上げることの社会への貢献を訴える。他方で彼は、古典派は、自然破壊を押し進めると同時に、自然を含めたすべての美を失わせる、と主張する。この美学は、彼が美術評論家として出発したことに由来すると考えられる。そして、以上の視点は、ラスキンの価値観に鮮明に映し出された。古典派が価値を経済的有用性としての交換価値とみなすのに対し、ラスキンは、モノの価値を、生に強いことを意味するヴァロールというラテン語の概念に基づきながら、生に対して役立つもの、と規定する。しかも、その生には、愛や歓喜などのすべてが含まれる。富もそうした価値あるものの所有から生れる。それゆえ真の経済学は、彼によれば、生に導くものを望み、かつ働くことを国民に教示する学問、とみなされる。([4])

以上、ラスキン経済学の骨子をごく簡単に要約した。このことからだけでも、現代の経済学が、彼の描いた経済学といかに乖離しているかがよくわかる。ラスキンによれば、最も富裕な国は、最大多数の高潔にして幸福な人間を養う国、を意味する。果して、これにあてはまる国がどれほどあるだろうか。そもそも、彼の唱える富と価値に基づいて経済を運営していれば、危機などは生じなかったのではないか。現代の資本主義は、間違いなくルネッサンスを必要としている。([1])それは同時に、経済学の再生に結びつく。私は、capitalismのismにおけるiはindustrious(勤勉)、sはsaving(節約)、そしてmはmoral(道徳)を示す、と考えたい。カネがモノと離れてカネだけを生み、人々は浪費をし、さらに不徳の行為が罷り通る現代は、資本主義自体をやがて崩壊させるのではないか。([2])利他心の重要性という観点から、M.モースの贈与論が見直され、道徳をベースとした資本主義論が論じられるのは当然の成行きであろう。([3][5][7])経済学は、偉大な先人が示してきたように、今一度、人間と社会の思想に基づく必要がある。これこそが、経済危機を根本から脱け出させる正当な道筋である。そう思わざるをえない。

(参考文献)
[1] 神谷秀樹著「強欲資本主義を超えて：17歳からのルネサンス」ディスカヴァー・トゥエンティワン、2010年
[2] R.ドーア著「金融が乗っ取る世界経済：21世紀の憂鬱」中央公論新社、2011年
[3] M.モース著；吉田禎吾,江川純一訳「贈与論」筑摩書房、2009年
[4] J.ラスキン著；飯塚一郎訳「この最後の者にも」中央公論新社、2008年［開架3階 331/R88/1］
[5] Cuillerai,M., *Le capitalisme vertueux:Mondialisation et confiance*, Payot, 2002
[6] Kindleberger,C.P., *Manias, panics and crashes:A history of financial crisis*, 4th.ed., Palgrave, 2002［閉架 338/19/3-3］
C.P.キンドルバーガー著；吉野俊彦・八木甫訳「熱狂、恐慌、崩壊：金融恐慌の歴史」日本経済新聞社、2004年［開架3階 338/19/7］
[7] Salmon,A., *Moraliser le capitalisme?*, CNNRS editions, 2009［閉架 331/15/36］

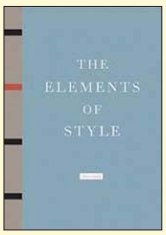
ブックレビュー　新入生にイチ押しの1冊

『全国アホ・バカ分布考：はるかなる言葉の旅路』

松本修著
太田出版 1993年（新潮文庫にもあります）
（開架4階 810/2/29）
大学博物館長
国際文化学部 国際文化学科 教授　高倉 洋彰

バカ・アホにはいろんなニュアンスがあります。福岡で「そんなバカなことをして！」と言われても、迂闊さを注意されるにすぎませんが、大阪では頭の悪さを指摘することになりますから、相手は怒ります。だから「アホかいな！」と言いましょう。アホ・バカは地域によって受け取り方が異なり、ボケ、タワケ、ホウケ、トロイ、ウトイなどになることもあります。本書は、それぞれの言葉の地域性を考え、歴史性や相違の意味を明らかにしています。その調査や分析の方法は、何かを考え解決しようとするときの、大きな参考になります。思考の対象はアホ・バカですが、大きな結実をもたらす優れものの書です。寝転がって笑いながら読んでください。

『The Elements of Style』



William Strunk, Jr., E.B. White著
Penguin Press 2005年
（閉架 836/0/169-3）
国際センター所長
商学部 経営学科 教授　小島 平夫

著者のメッセージは“(This requires … that) every word tell.”です（II章の17節）。例えば、受身形はできるだけ使わない。分かりにくい二重否定は避ける。修飾語は被修飾語の近くに置く。即ち、文章は簡潔に明確に書く。この作法を強く推奨するのがこの英語文献です。第1版は1918年にまで遡る名著です。私は、米国UCLA経営大学院博士課程学生のとき買い求めた1979年刊第3版を今でも時折読んでおり、国際センター長として国内外の大事な意思疎通の場面で、自分の気持ちを理解してほしい、人を説得したいときの拠り所としています。新入生の皆さんもその簡潔明瞭な文章作法をこの本から学びとり、これからの4年間豊かな人間関係を築かれることを願っています。

『自分の感受性くらい』

茨木のり子著
花神社　2005年
（開架4階 911/56/256）
社会福祉学科実習指導室 実習助手
穴井 あけみ

この本は茨城のり子著の詩集ですが、特に心に響くのはタイトルの「自分の感受性くらい」です。著者のまっすぐな言葉からは、たくさんの情報があふれている現代、周りに流されることなく、自分自身の感性を大切にしよう＝自分を肯定しよう、というメッセージが投げかけられているのではないかと思います。

これからの大学生活において、人生において、自分自身と向き合う機会が多くやってきます。そんな時、ぜひ手にとって欲しい一冊です。『自分の感受性くらい/自分で守れ/ばかものよ』。時に自分に問いかけるべき言葉なのかもしれません。

『下町ロケット』

池井戸潤著
小学館 2010年
（開架4階 913/6I33/7A）
図書情報課 課長
古庄 敬文

故児玉清さんが西南で講演をされた時、その講演の中で「文学は実学だ」と話された。この「下町ロケット」はまさにそれを感じることができる小説である。日本の中小企業の技術力の高さ、大企業のプライドと驕り、知的所有権の問題、さらにエリート街道を挫折して稼業の町工場を継いだ社長の人間ドラマが展開されていく。読むごとに読者を惹きつけて離さないその内容は、スポーツ小説を読んだ後のようなさわやかさを届けてくれる。

大学に入って、いろいろとこれから迷うこともあるだろうが、そんな時に手に取って読むと元気を与えてくれる一冊である。

『池上彰の新聞勉強術』

池上彰著
ダイヤモンド社　2006年
（開架2階 070/4/44）
図書情報課 主幹
坂口 久人

入学おめでとうございます。

さて、皆さんは、日々自分に必要な情報をどのようにして手に入れておられるでしょうか。情報源としては、新聞、テレビ、ラジオ、ネットと様々あるでしょうが、ここでは、その情報源としての新聞について書かれている『池上彰の新聞勉強術』（池上彰著）という本を紹介したいと思います。新聞情報の創出・発信がわかりやすく書かれております。

新聞には様々な効用があります。まず、①膨大な量の情報が面毎に分類されて掲載されており、自分に必要な情報がどこにあるかが判りやすいこと、②多数の記者が集めた情報を編集の段階でさらに精選・吟味されるので、その情報に信頼がもてること、③実用的な文章で書かれているので、論理的思考力が身につき、社会に出た時に有用であること、④ネット上で検索して探す情報と違い、思わぬ情報が偶然見つかる場合があること等、様々な効用が期待できます。

新聞離れが言われる昨今ですが、是非身近にある新聞を活用して自分に付加価値をつけ、社会に出る準備をされることを期待しております。

『タイムスクープハンター』

NHK
NHKエンタープライズ 2010-2012年
（視聴覚 778/DVD/TAI）
図書情報課
小副川 明子

時は1898（明治31）年、岡山。かつての日本に「旗振り師」という職業があったことを、皆さんはご存知でしょうか？各地の山頂で旗を振り、リレー形式で米相場を伝達するのが旗振り師の仕事。山に登って旗を振る。なんて原始的なんだと思われるでしょうが、大阪堂島の米穀取引所から岡山米穀取引所まで、総距離158kmをなんと18分で通信したという…。

他にも「かぶき者」「駕籠かき」「紛争調停人」など、決して歴史の教科書に載ることのない非常にリアルな人々の生活を、タイムスクープ社の時空ジャーナリスト澤嶋雄一がレポートします。

新しい生活でちょっと疲れ気味の新入生の皆さん、DVDは貸出できませんが、図書館のAVブースで、時空を超えた気分転換をどうぞ。

世界の図書館

［チェコ・ロシア編］

バプテスト神学院図書館

International baptist theological seminary of the EBF library
Nad Habrovkou 3, 164 00 Praha 6, Czech Republic　http://www.ibts.eu/library

神学部 神学科 教授　松見 俊

『世界の図書館』というタイトルからすれば、在外研究で過ごしたチェコ共和国のプラハの、歴史あるカレル大学の図書館を紹介するのが筋であるが、私が期間中毎日利用したのはプラハ郊外の国際バプテスト神学院(International Baptist Theological Seminary)の図書館であるので、この神学単科大学の図書館を紹介しよう。これはこれで一風変わった図書館紹介になろう。

この神学校は、元はスイス、チューリッヒ郊外のリュシュリコン(Rueschlikon)にあった神学院(1949年設立)がプラハに移された(1997年)ものである。私はこの神学院の卒業生(1981年修士)であるが、中欧、南欧のバプテスト(自由教会)の指導者養成のために設立されたものである。しかし、旧共産主義圏の諸国の人材の養成のため、立地条件の良いプラハに移されたものである。そんなわけで私が在外研究の場所をプラハに決めたのは使い慣れたこの図書館の蔵書が目当てであった。

［図書館メインビル］

［図書館定期刊行物の棚］

［図書館スタッフ］

●図書館の建物

この神学校自体がプラハ6街区(Nad Habrovkou 3 16400 Praha 6, Czech Republic)の森の中の古城のような建築郡を買い取って修復したものであるから、写真のように図書館はまさに古城の趣きである。中央の庭園では時々結婚式が挙式され、またキャンパスには3星ホテルの宿泊施設が併設されている。中央扉から入ると貸し出しカウンターがあり、西南学院大学と同じOPAC検索システムのコンピューターが左右に並んでいる(システムにはログイン番号を貰って入る)。書庫は1階両翼にあるが、一方の翼には20名ほどが利用できる学生のための研究机が備えられ、私用コンピューターの電源も各デスクに備えられている。中央の建物は3階建てであるが、2階、3階はすべて書庫であり、開架である。

●開館時間

開館時間は、月、火、木、金曜日は朝9時半から夕方5時まで、水曜日は、長いチャペルがあり、コーヒータイムがあるため、10時半から午後4時までである。開館時間が短く、在外研究中はほとんど図書館内で開館時間一杯過ごしたが、朝が遅く、閉まるのも夕方で個人的にはいらいらしたことも多かった。しかし、旧共産主義圏諸国からの学生たちはのんびりしたものである。週末に閉館していることも不便であるがかつてのスイスの図書館で週末も勉強している私を見て、学生たちは「自分たちが休んでいる時間に勉強するのはアンフェアである」と言われたものである。図書館司書はズデンコ(Zdenko Sirka)という30歳台の男子青年であるが、彼はドイツで神学修士を終え、スロバキアのブラティスラバ大学の博士課程に在学している。写真のように他のスタッフは学生のアルバイト、あるいはボランティアの数名である。

●蔵書

7万冊以上の蔵書は、欧州の伝統ある大学と比べると見劣りするのであろうが、学生の共通語が英語であるため、英語の神学文献、独語、伊語など他の欧州言語の原書からの英訳本など、英語文献については欧州大陸では一番充実していると言えよう。ちなみに、研究社の「英和中辞典」が備えられているのはかつての日本人学生が残していったものであろうか。また、神学関係の定期刊行物は180種類と豊富である。ただし、私が在外研究のテーマに選んだ15世紀の宗教改革者、異端として処刑されたヤン・フスのラテン語とチェコ語の文献はそれほど豊かではなかった。そのような場合はカレル大学の図書館に借りに行けばよいのであるが、私は、チェコ語は出来ないので、フスのラテン語の主要文献をその英訳、独訳を参考にしつつ読むだけであったので、カレル大学図書館に行く必要はなかった。

●本の貸し出し

本の貸し出しは一人数冊、数日間である。先ほど言及した図書館内の学習机には登録なしで開架から本を持ってくることはできるが、借り出しを示すカードを挟んでおかないとすぐ回収されてしまう。私はゲスト研究者であったので、借り出し期間は数週間と長めであったが、1日でも超過すると私のメールに警告と小額ではあるが罰金が科せられる旨の案内が届く。本の整理は神学生のアルバイトが行っているが余りに厳格なので少々むっとすることもあった。

以上が、チェコの神学単科大学の図書館事情である。

［パプテスト神学院図書館。向かって左側が開架式書庫と学生机のある建物］

［ロシア国立図書館正面とドストエフスキー像］

ロシア国立図書館（旧レーニン名称ソ連国立図書館）

Russian state library
Moscow, Vozdvizhenka, 3/5　http://rsl.ru/

経済学部 国際経済学科 教授　上垣 彰

1987年夏、私は日本学術振興会の資金を得て、初めてモスクワに滞在する機会をもった。受け入れ先である研究所の図書館も利用したが、それよりもよく通ったのが、通称「レーニン図書館」（ロシア人は「レーニンカ」と呼ぶ）、正式には「V・I・レーニン名称ソ連国立図書館」である。ここで「レーニン名称」という表現は、「レーニンの名を冠した」という意味で、ロシアではいろいろな建物や組織、工場などが有名人やゆかりの人物の名を冠している。もちろん、ソ連解体・共産党政権の敗退以後は、「レーニン名称」も「ソ連」もとれて、単に「ロシア国立図書館」と呼ばれるようになった。添付写真にあるように、現在図書館正面にはドストエフスキー像が設置されているが、私が1987年に通っていた当時はここにレーニン像があった。ただし、興味深いことに、図書館最寄りの地下鉄駅の名はいまでも「レーニン名称図書館」である。

［閲覧室］

「ロシア国立図書館」は世界最大級の図書館で、ロシア語および世界367の言語の書籍4700万冊が所蔵されている。その他、地図、音源資料、博士論文の膨大なコレクションを持っている。毎日約4000人が訪れるほか、ロシアおよび旧ソ連の80の都市からインターネット閲覧が可能である（以上、同図書館ホームページから）。

1987年当時も現在も、外国人がこの図書館を利用するのはそれほど難しいことではない。当時は、パスポートを持参して、入り口を入って右側の事務所へ行って、「入館証」を作ってほしいといえば、パスポートとヴィザを確認して、私が持参した顔写真を厚紙の入館証用紙に貼って、ポンとハンコを押して、入館証を作ってくれた。これさえあれば、この図書館の膨大な資料が利用可能となるのだ。現在では、もう少し近代化されていて、入館証はプラスティック製のカードになり、写真は、運転免許証みたいにその場で写したものをカードに刷り込む形になっている（事務所は別の分かりにくい箇所に移っている）。

さて、1987年当時私が取得した入館証には、「第1閲覧室」と書かれていた。「第1閲覧室」は、「由緒正しい」閲覧室で、天井の高い広く立派な部屋だった。ロシア人ではアカデミー会員（最も権威あるソ連の研究者）しか入れない部屋である。そこに外国人なら私のような若造（当時）でも入れるのだから、ずいぶん良い思いをしたことになる。ただし、当時の私はそれほど優遇されているという実感はなかった。

図書はどうやって借りるかというと、まず、昔ながらの図書目録カード（恐るべき量）から、めぼしいものを探し出して、図書分類番号をメモする。申し込み用紙に自分のID番号と図書分類番号、著者名、書籍名などを記して、閲覧室の入り口付近に座っている係りの人に渡す。それからだいぶ待つと、閲覧室の隣にある部屋の書棚の、私のID番号が書かれた箇所に請求した図書が置かれている。時間を見計らって書棚を点検しにいき、請求した本を見つけたら、入館証その他を見せて、それを借り出し、閲覧室で読むことになる。つまり、完全な閉架式で、出てくるまで請求した本が実際にはどういうものか分からない。出てきた本を見て、想像していたものとは全く異なっていてがっかりしたことが何度もある。もちろん、本を図書館の外に持ち出すことはできない（これは日本の国会図書館でも同じ）ので、借りた本は閲覧室で読んでメモを取るか、コピー依頼するしかない。コピーだと出来上がるまでまた待つ必要がある。「センシティヴ」な文献の場合は、コピーを拒否される。

待っている時間に、食堂へ行ったり、雑誌室へ行って雑誌をぱらぱらめくったりして過ごす。煩瑣な手続きのために、ずいぶん不合理な時間の過ごし方をしたようにも思えるが、考えようによっては、その全体が贅沢な時間だった。夏の雨の後、「第1閲覧室」で、メモを取るのに疲れて、何気なく、アカデミー会員らしい老人の横顔を眺めていると、開け放たれた窓からヒンヤリしたモスクワの風が入ってきて、私の頬をうつ。もう何年もこんな経験をしていない。

システム リプレイス

SYSTEM REPLACEMENT

1【予告記事】

図書情報課：坂本 里栄

2012年10月より新しい図書館システムが稼動します。リプレイスに伴い、資料検索等便利になる項目がいくつかありますので、今号及び次号にて紹介していきます。

OPAC　Online Public Access Catalog

●「BOOK」データベース導入

ブックデータベースを導入することにより、本の簡単な内容や目次情報が表示されるようになります。活用例としては、実際に手に取るかどうかを決める参考情報としての利用が期待されます。

●My OPACの導入

検索履歴の保存、貸出状況・予約状況等の確認、文献複写・貸借申込み・状況確認等を一元的に閲覧することができるようになります。

●検索がより便利に

入力語句の予測変換が表示されるサジェスト機能、検索結果をキーワードや出版年で絞込みできるファセット・ブラウジング機能が追加されます。また、検索結果を次ページに紹介しているリンクリゾルバ、RefWorksに連携可能です。

●外部サイト検索

CiNii BooksやAmazonのような外部の資料検索サイトについても、OPAC検索画面から検索が可能となります。OPAC検索と合わせて活用することでこれまでより手軽に情報収集をすることが可能となります。検索対象とする外部サイトについては、現在検討中です。

●携帯端末への対応

現在は、携帯電話、スマートフォン向けのOPACは提供しておりませんが、新システムでは、これらの端末からも検索・各種手続きができるようになる予定です。

システムリプレイスに向けて

現在図書館では、システムリプレイスに向けて詳細な検討に入っています。特に電子ジャーナルやデータベースについて、より検索性が向上することに主眼を置いて検討を重ねています。

また、貸出延長や予約等のこれまで図書館に直接来館することが必要だった諸手続きにつきましても、可能な限りMy OPACの中で手続き可能な運用とする予定です。

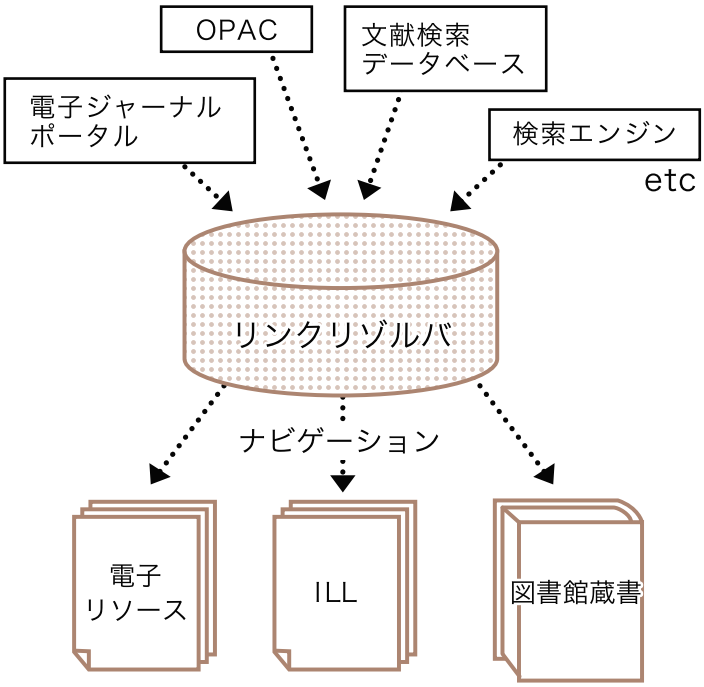
リプレイス前後におきましては、図書館を利用される皆様にご迷惑をおかけするかもしれませんが、ご理解とご協力をお願いいたします。

リンクリゾルバ

みなさんは他大学から文献を取寄せるサービスを申し込んだら「電子ジャーナルの契約がありますのでそちらをご利用ください」と案内された経験はありませんか?

今回のシステムリプレイスで導入されるリンクリゾルバは、文献検索データベースやOPACなどの検索結果を元に、文献そのものを手に入れるための道筋を示してくれる仕組みです。リンクリゾルバによって、これまでより簡単に最適な文献の入手方法に辿りつくことが出来るようになります。

リンクリゾルバ概念図



RefWorks

RefWorksは文献を管理するためのソフトウエアです。文献検索データベースや検索エンジンの検索結果を取り込んで自分仕様の文献情報データベースを作ったり、任意の形式で参考文献リストを作成したりすることができます。

Webベースのサービスのためインターネットへの接続環境さえ整えばいつでもどこでも使うことができます。

電子リソース

電子リソースとは、データベース、電子ジャーナル、電子ブックといったオンラインまたは電子媒体によって提供される情報の総称です。電子資源、e-リソースとも言います。

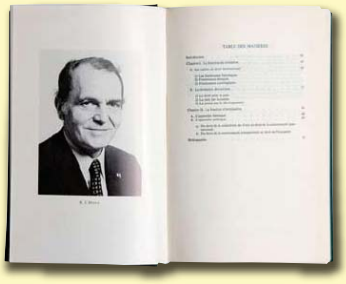
本学でも、数千タイトルの電子ジャーナルや各種データベースを整備しています。図書館ホームページの「学術ポータル」よりご利用ください。

蔵書ギャラリー no.13

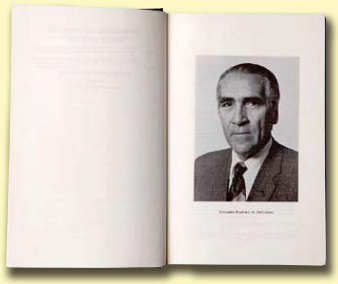
法学部 国際関係法学科 准教授 小寺 智史

『ハーグ国際法アカデミー「ハーグ国際法講義録」(1923年～)』

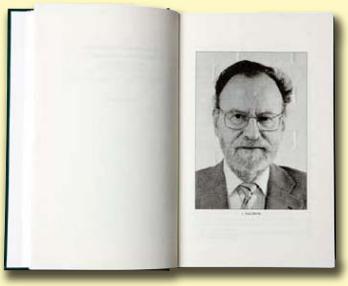
Académie de droit international,*Recueil des cours*,Hachette,1925-[閉架 329/98/1-,329/09/1-]



R.J.DUPUY氏 (1973年)



EDUARDO JIMENEZ DE ARECHAGA氏 (1978年)



J.SALMON氏 (2010年)

毎年夏になると、世界の国際法学者たちがオランダのハーグに集まってくる。その目的は、ハーグ国際法アカデミーが主催する夏期講座に参加することである。この講座では、世界を代表する国際法学者たちが講義を担当し、その内容は『ハーグ国際法講義録』に収められる。ハーグ国際法アカデミーがカーネギー財団の支援によって平和宮に設置されたのは1923年であるが、それから現在に至るまで公刊が続けられている。その総数は350冊に達しており、国際法学においてもっとも重要かつ権威ある書物のひとつと言ってよい(講義は国際公法と国際私法の双方に関してなされるが、筆者の専門上、前者に限定して話を進めることにしたい)。

西南学院大学にはすべての講義録が所蔵されているが、通読してみると、各講義がなされた当時の世相を垣間みることができる。興味深いのは、第二次世界大戦以前(1923年～1939年)は、担当する講師の国籍・母語にかかわりなく、講義がすべてフランス語でなされていることである。英語での講義が登場するのは第二次世界大戦後のことで、英国の国際法学者ハーシュ・ローターパクトによる講義「人権の国際的保護」(70巻、1947年)が最初である。確かに、外交関係ではフランス語はいまだに一定の地位を占めており、例えば、国際司法裁判所の判決は現在でも英語とフランス語が併記される。しかし、現在の英語趨勢の傾向をかんがみると隔世の感は否めない。

講義は、国際法全般を扱う一般講義と、個別のテーマを扱う個別講義に分かれる。このうち、後者の個別講義には特に各時代の状況を反映したものが多い。例えば、マンフレッド・ラックスの「宇宙国際法」(113巻、1964年)は、1957年のソ連のスプートニク1号の打ち上げを受けてのものである。また、ツェマネク「国家承継と脱植民地化」(116巻、1965年)、エル＝ナガール「国連貿易開発会議」(128巻、1969年)、ドゥ・ラシャリエール「国際法に対する国家の発展の不平等の影響」(139巻、1973年)などは、1960年代の脱植民地化以降、南北問題が国際社会・国際法が対応すべき重要な問題となったことを示している。

この講義録には、日本の国際法学者による講義も含まれている。入江啓四郎「儒教の観点からみた国際法原理」(120巻、1967年)、横田喜三郎「組合目的の結社の自由の国際基準」(144巻、1975年)、小田滋「海洋資源の国際法」(127巻、1969年)、同「裁判官席からみた国際司法裁判所」(244巻、1993年)、村瀬信也「越境的環境問題に関する国際経済法的視点」(253巻、1995年)などである。また近年では、大沼保昭『国際法の文際的視点』など一部の講義がポケット版で公刊されている。このようにハーグ国際法講義録に多くの日本の国際法学者たちの講義が収められていることは、日本国際法学が世界で高い評価を受けていることの表れとみなすことができる。

なお、2012年度の講義では、九州大学の柳原正治教授が「ヨーロッパと東アジアにおける国際法の歴史の意義」と題した講義を7月23日から4日間行われる予定である。おそらく筆者は参加することがかなわないが、講義録を通じて、遠くハーグの地での国際法学者たちの議論に耳を傾けたい。

編集後記

新年度がスタートしました。新入生の皆様、入学おめでとうございます。図書館の入退館ゲートも新しくなりました。学生証がICカード化されたことに対応したものですが、ゲートにタッチすると開くようになりました。出る時にも、学生証が必要になりますので、ご注意ください。慌てて出て行って、ゲートに突っ込みそうになる方も見受けられます。秋には、図書館システムも新しくなります。どうぞ、お楽しみに。 (D.Y)

西南学院大学図書館報 No.172

2012(平成24)年4月27日発行

編集　図書館報編集委員会

発行　西南学院大学図書館

〒814-8511

福岡市早良区西新6丁目2番92号

TEL(092)823-3426

http://www.seinan-gu.ac.jp/library/

SEINAN GAKUIN UNIVERSITY